

2010年 9月25日 東日本区1998~2011 ヒストリアン 吉田 明弘

## 部の分割とネーミング

1947(昭和22)年に日本にも部(District)を設けることになり、東日本部と西日本部が生まれました。領域は現在の東西日本区と同様でした。西高東低といわれていましたが、1949年、西日本部は西部と西南部(現九州部)に分かれ、これに合わせて東日本部は、東部と改称しました。

この調子で書きますと部の変遷だけで紙数が尽きてしまいますので。話をネーミングに戻します。部の変遷については、『東日本区10年の歩み』p94-95をご覧ください。

その後、それぞれ分割や独立があり、1980年時点では、北から北部、北東部、南東部、北西部、中西部、西部、南西部と落ち着きました。部名はすべて方角で示しています。現在、この領域を正確に言える人は少ないでしょう。特に、東京にあるクラブが、北東部と南東部に分かれて所属したり、沖縄のクラブが南東部に所属するなど、複雑でした。

方角によるネーミングは、米国に倣ったのですが、クラブ名さえはっきり地名を表現していれば、部名は、記号でも良いという考えがあったのでしょうか。

現在は、北海道部、湘南・沖縄部、富士山部、びわこ部、京都部、六甲部、瀬戸山陰部、西中国部、九州部など、ひと目でどの地域が分かる部名が増えています。

その皮切りが富士山部でした。

## ユニークな富士山部

1978年になって、熱海クラブが中心となって、沼津・湯河原・伊東クラブが南東部から独立することになりました。当時の南東部は、東京都南西

地域と神奈川、静岡県クラブで構成されていました。東京と横浜のクラブはYMCAの施設を根拠として、どちらかといえば、人脈で集まったサラリーマン中心のメンバー構成でした。一方、独立を目指した4クラブは、YMCAのない地域密着型、メンバーのほとんどが独立企業主でした。そのため、クラブ運営、地域に対する意識、活動に対する評価基準にも違いがありました。

しかし、そのことが分割の動機ではなく、むしろ良い意味での細胞分裂でした。独立自体は、歓迎されましたが、問題は「富士山部」という部名でした。日本のシンボルとも言うべき富士山の名を一部のクラブが用いてよいかということが議論になりました。当初の構想では富士山を中心として、甲府クラブにも声がかかったようです。社会人都市対抗野球や高校野球に「山静代表」がありましたから、あり得る組み合わせでした。

結局、甲府は加わりませんでした。富士山部の設立は、認められました。富士山部は、1988年までに4クラブから9クラブへ躍進しました。

## わかりやすい名付けとイメージ化

このことも契機となって、1982年には南西部が九州部、1993年には北部が北海道部と、分かりやすく、所属するクラブが一体感を意識する部名に変更しました。

1996年、京滋部が京都と滋賀が自ら分割しました。北海道部を除くと初めての都道府県単位の部となりました。1983年に北西部が中部と京滋部に分割した時、京滋部は9クラブ、300人でしたが、13年間に京都は15クラブ500人、滋賀は6クラブ200人に増加しており、分割は、当然の帰結でした。

京都の「京都部」に対して、滋賀は、「びわこ部」とネーミングしました。

このびわこ部が「ネックレス構想」を発表しました。琵琶湖は首飾りの形をしています。湖畔に沿う市町村にクラブをつくり、これらを結んで首飾りにしようという構想でした。富士山部に続く部のイメージ化の先駆けともいえます。

## 再編成による新部名

1997年の日本区の東西日本区分割の際、東日本区では部の再編が行われました。

北海道部 変更なし

富士山部 変更なし

北関東と東北（現北東部）

神奈川と沖縄（現湘南・沖縄部）

東京城東地域と南関東3県（現関東東部）

東京中央・城南地域と町田・新潟（現東新部）

東京城西を含む JR 中央線沿線（現あずさ部）

部の再編案は、検討委員会が策定しました。

～ については、地域の近さだけでなく、情報の共有、違ったものを学び合えることを考慮しました。ですから、首都圏のクラブが4つの部に分かれているのです。案は、部評議会、区代議員会の承認を得ましたが、部のネーミングは当然のことながら、新部で検討し、決定しました。

関東東部の部名は、東京のいわゆる下町（川の手）と千葉、埼玉（後に茨城）が領域であることからでしょう。

湘南・沖縄部は、横浜クラブと沖縄2クラブのスポンサー関係から発する縁ですが、「・」には、沖縄那覇クラブ創設以来の「海洋部」（当時の1案）としての独立の夢が込められています。

東京と新潟（当時は新潟クラブがあった）のクラブによる東新部も、地域性にこだわらない案が出ましたが、最終的には、東京と新潟の名を用いるという分かりやすい名に決めました。

一番難航したのは、あずさ部でした。JR中央線というコンセプトでした。地域的なことから考えて、こぶし（甲州・武州・信州）部という案と、

あずさ部という案が対立しました。「あずさ」というのは、新宿・松本間を結ぶ特急の愛称です。「あずさ」は梓川に由来するのですが、実際の梓川は中央線に沿わずに、日本海に注いでいますから、部名の「あずさ」の語源は特急でした。地域を表現し、団結のシンボル「こぶし」か、コミュニケーションと交流の象徴「あずさ」かは、採決によって僅差で決まりました。

## イメージの効用

人は、理性だけでは行動しません。むしろイメージに左右されます。人生の大事な選択、たとえば、進学先や就職、大きな買物などの決定は、理性的な比較ではなく、イメージで評価することが多いのです。モノを買うのではなく、イミを買うのだとも言われます。

まして、ワイズの世界では、理性でなく、イメージで判断する場面が多いでしょう。

ならば、なるべく良いイメージを構築することが大切だということになります。

## 部にも良いイメージが必要

部にもイメージが大切です。部に良いイメージが形成されると、属するメンバーの士気が上がり雰囲気が変わります、参画が意欲的、積極的になります。話の通りが良くなり、協力し合うことに楽しさが増加します。

## ある部のイメージ調査

あずさ部が、2006年10月の部会と2009年の評議会で「部のイメージ」についてアンケート調査を実施したことがありました。回答者はいずれも当日の参加者で約50人でした。

まず、あずさ部について、「新しいことに取り組んでいる」、「明るく楽しい」、「東日本区で一番良い部だ」など、9の文を示し、それぞれに「まったくそう思う」、「まったくそうは思わない」という5段階の評価をしてもらいました。

2回とも、恥ずかしくなるほど良い結果がでま

した。

次に東日本区 7 部のイメージを「色」で表現してもらいました。この回答には、部についてのイメージよりも部名（地域）のイメージが明らかに出ました。湘南・沖縄部が「青」、北海道部が「白」といった具合です。

ここで分かったことは、他の部についての情報がほとんどなく、分からないということ、そして、当然のことながら、知らないことには、良くも悪くもイメージが生まれにくいということでした。

部の良いイメージを形成するためには、部を知ってもらうことが肝心です。そのためには、はじめから文章や話といった言語表現では無理です。実際に接して、実感することです。

そのために、新しいイベントを企画することも結構ですが、今は会合が過多になっていて、そのこと自体がワイズのイメージを下げかねない懸念があります。

すでにある会合を大胆に変化させるか、ちいさなことで、楽しいもの、新しいもの、真似したくなるものを加味する工夫が大切です。参加することによって、自分が新しくなれるという期待感、何かあるぞ、というイメージが大切だと思います。

### 沖縄のクラブの東日本区所属

沖縄のクラブが東日本区に属しているのはなぜか？との質問があります。地理的にいえば、西日本区が妥当なのかもしれません。後付けの理由が語られることがあります。その当時、何が決定的な理由だったかは、今となっては分かりません。次のような背景がありました。

最初のクラブである沖縄那覇クラブが国際加盟した 1966（昭和 41）年当時は、沖縄は米国の統治下で、本土復帰は 1972 年であった。

クラブづくりは末包（すえかね）敏夫・横浜 YMCA 名誉総主事の提言によって始まった。指導したのは、当時のライオン歯磨社員、駐在所長の青木博さん（大阪）と海外事業部の杉本恭之助さん（横浜）であった。

スポンサークラブは、横浜となった。

当時の南西部（現九州部）のクラブは、福岡、門司（北九州）、大牟田、長崎、熊本だった。当時の本土便は JAL 国際線で、経路は東京 - 大阪 - 那覇 - 台北 - 香港、週 5~6 便、片道運賃は、那覇 - 大阪 24,500 円、那覇 - 東京 28,650 円だった。

1966 年以前に沖縄に設立された他の国際奉仕クラブは、グアム、サイパンとともに東京のクラブと同じグループに属した。

そのようなことから推察すれば、当時の東部に所属することは自然の流れだったように思います。その後は、横浜クラブとの関係から、南東部を経て、湘南・沖縄部を結成しました。

### あとがき

私事になりますが、私がワイズメンズクラブに入会した 1966 年の区大会の会場は、川崎・よみうりランドでした。自宅から私鉄で行けました。8 月の国際大会はホノルルで、海外渡航が自由化された年でしたが、こちらに不自由があって、あきらめました。

秋の東部部会は札幌。就職して数年目でした。私の会社などでは、当時、緊急と、課長以上に随行する時以外は空の便を利用できませんでした。

ですから、土曜日の朝発って、日曜日夜に帰ってくるなどということは出来ない時代でした。何年したら部会に参加できるようになるのか、なんだか仲間外れにされたような、つまらない気分を味わいました。

大変幸せなことに、この年で東部は分割され、私の属した南東部の翌年の部会は、東京・日比谷の日活国際会館でした。もちろん参加して、他クラブの方とも交歓して、自分の中で、ワイズの楽しさが一気に膨らんだ記憶があります。

例会の会場もそうですが、リーダーは、将来を考え、常に入れ物の大きさ、入れ物の魅力に気を配っている必要があると思います。